

# 大震災・原発事故 から1年

(株)ピーピーキューシー研究所  
代表取締役社長  
加藤宏光



## はじめに

《東日本大震災》が起きて早くも1年が過ぎる。短くて長いこの期間に何が起きて何が変わらないのであろう?! 筆者は被災地にあつて、養鶏業界の方々とさまざまな障害について語り合い、対策を講じるお手伝いをしてきた。1年が過ぎたのを機に、この間の事態の流れを、私感を含めながら概説してみたい。

まずは、突然のあの時からの出来事を、時間の流れにしたがつて追いかけてみよう。

## 3・11

平穏な1日であるはずの2011年3月11日の午後2時46分、デジカメを使って日経新聞のスクラップをしていた時に突然傍らに置いた携帯が聞いたこともない音をたてはじめた。見ると《緊急地震速報、宮城沖で地震発生。強い揺れに備えてください》と表示されている。その時には、すでに異様な揺れを感じはじめた。それから2分あまり続く激しい揺れに、何かしらこれまでに経験のない

大事件が予感された。

帰宅後、初めて見た東北地方太平洋側への大津波に息を呑んだ。言葉もないとはこのことであろう。そして、翌日の福島第一原発の水素爆発。炉芯を冷却するための関係各位の死をも恐れぬ献身的な努力は心を打つものであり、恐ろしい展開と同時に目的に対して一筋に打ち込むプロの姿を改めて認識した。

一方、後に明らかにされた《爆発寸前の原発を放置して逃げることしか頭にない、という東電幹部の実態》が徐々に明らかにされてきた。また、時の総理大臣も大震災という未曾有の状況下で本来国全体の司令塔であるべき立場を離れ、ヘリコプターで現地を視察にきたという。

その時の言い種。『こんなものを見る機会は二度とない』と報道されて、響感を買った。事の真実はわからないが、そうした噂が立つほどに信頼されていない人が、このような未曾有の事態で国のトップにあつたことは残念というほかない。

## 避難地域の設定

避難地域は同心円状に、半径5キ



写真1 瓦礫の山と枯れかけた松



写真2 津波で破壊された家

ロメートル(後に10キロメートル)以内が緊急避難、20キロメートル以内が避難準備および30キロメートル以内が《屋内避難区域》に設定された。この画一、幾何的設定が当時明らかになされたが、あたかも秘匿されていた、と噂されるSPEDIの計算結果で予想されていた放射性物質の雲が流れたルートと実際の軌跡が一致していた、という事実を踏まえて物議を醸した。

### 養鶏場の待避

原発事故以前に福島県には推定450万羽の採卵鶏が飼育されていた。これらのうち約150万羽の成鶏とそれを支える(育成業界を含めるとそれ以上の)採卵用のニワトリが放置・淘汰された。屋内待避区域にある養鶏場の中には、あくまで業務を維持する固い意思の下、警戒条件が解除されるのを仲間と一緒に飼育維持をされた経営者もあった。

### 屋内待避区域から

### 緊急時避難区域への変化

爆発事故から1カ月あまり、耳慣れない《緊急時避難区域への変化》と

いう管理体制へと変化した。つまり、屋内に閉じこもる生活から、いざという場合には即座に待避できる準備を前提としてはいるものの、通常の生活を営む条件が整ったことになり、これを獲得するに至るまでのさまざまな人々の努力と経過はそれだけで物語になる。

### 大震災による業界の被害

被害金額などの具体的な統計数値を挙げることは、本稿の目的ではない。被害を概観すれば、▽大震災による鶏舎やシステムの崩壊などの直接被害▽大津波による直接被害▽飼料工場が大震災・大津波被害で稼働を停止したために飼料供給が停止。これによる生産被害▽停電による被害(換気不良・断水等)▽食鶏処理場の震災もしくは大津波——といったところだろうか。

著者が直接見たものは多くないが、東北の大型採卵農場でウインドウレス鶏舎が倒壊し60万羽強が淘汰されたケースや、新しい農場で地盤が崩れ、これによって数棟の大型鶏舎が腰折れ状態になったケース、さらには中型の採卵農場では鶏舎全体

が倒壊し、再起が難しいケースなどを聞いている。

プロイラー農場では、出荷先の食鶏工場が稼働停止し、飼料も届かないという二重の困難に淘汰を余儀なくされた農場が多いらしい。

### 飼料工場のダメージ

4月末に、長年仕事をサポートしてくれている妻とともに、仙台空港から仙台港・塩釜港、さらには南相馬一帯を襲った大津波の実態を実際に見に行った。その被害は想像を絶するものであったが、仙台港にある飼料コンビナートが津波を被り、無残な姿を呈していた(写真3、4)。

当時、東北太平洋側の飼料工場は壊滅的で、また鹿島コンビナートにある飼料工場もその多くが浸水によって稼働できなくなっていた。

どうか被害を免れた採卵養鶏場では、《大震災後の飼料をどのようにして継続的に入手するか》が重要な課題となった。この時点では、関東以北の飼料メーカーサイドでも浸水で使用不能となった飼料原料が多く、限られた供給能力で《どのように顧客へ配分・配送するかを決めること》

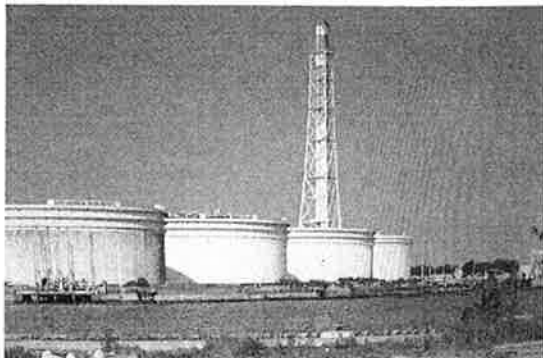


写真3 飼料穀物サイロ



写真4 飼料コンビナート遠景

が緊急命題となった。詰まるところ、運送手段を確保できるかどうか、それまでの付き合いがどうだったかを踏まえて、配送先を決めるしか手段はなかった。これによって震災後、異常に上昇した卵価によるメリットを享受できるか否かが別れたことになる。

### 再興への道

再興は自力によるものと、補償によるものがあった。力尽きて廃業への道を選んだケースは、概して少ないのはせめてもの救いといえるだろう。とりあえずの業務再興には、まず飼料が確保できるか、という条件が立ち塞がる。飼料会社が再び飼料を十分に供給できるようにするのに、6月までの4カ月近くを要した。

3月11日から10日間ほどは大震災による交通網の分断で、流通はほとんど麻痺状態であった。こうした状況の中で、行き場のなくなったタマゴを躊躇することなく、大震災後に食料の入手が困難になっていた近隣住民へ無料提供するなどの奉仕行為を行っている生産者が多かった。

運送に欠くことのできない軽油は、

ガソリンスタンドにある程度備蓄されている。スタンドの経営者は、日頃の取引高等々の付き合いに応じて軽油の供給に応じたが、多くの業界で必須のモノとして要求されるため、十分な量を確保することは難しい。先見の明がある生産者は自社に地下タンクを設備し、あるいはスタンドそのものを自社用に確保しているなど改めて感心したものであった。

飼料メーカーでも餌の割り当ては考えられても、配送をどうするか極めて高いハードルとなっていたため「自分で輸送用の軽油を準備できる」ことを条件付けることになってしまった。総合的にみれば、日頃の付き合いが良いことが危機を回避するのに有効であったといえよう。

### 風評被害

原発事故の直後から今回の影響はチェルノブイリのそれと対比され、ヨード剤を配布しなかった行政への非難等がマスコミを賑わせた。

また、放射性ヨウ素(I-131)が千葉県や神奈川県など関東一円に飛散して、これが付着した、つまみ菜、ほうれん草等の葉野菜からお茶に至

るまで出荷制限を受ける農産物が続出した(行政の規制によって出荷が制限された生産物は東電からの補償が受けられた)。東京都の水源に汚染が確認されたため、騒ぎが加速されたことも否めない。

このような放射性ヨウ素の各種の汚染が報道拡散することで、福島県のタマゴに対する安全性への心配が起き、買い控えが起きた。しかし放射性ヨウ素の半減期が8日間であり、1カ月後には当初検出量の7%ほどまで減衰するため、5月の末時点では流通に大きな混乱は感じないほどの問題となっていた。

一方、避難対象の区域にある農場では、対応が複雑に区分されていた。◎緊急避難区域・有無を言わずの待避で、ニワトリたちに何らの処置もできずにただ身一つで退避した

◎屋内退避区域・乳幼児等以外のヒトは自分の意志でその場に留まることはできる。しかしあくまで屋内にじっとしていることが前提となる

あくまで自分の農場を守る姿勢の経営者は、この屋内退避区域の変更を期待しつつ、屋内退避の例外とし

て区域解除後に復帰するための環境整備作業、すなわち退避した後に残る餓死したニワトリの残骸などを避けるため、自分で殺処分して埋却処理する特例を得て、育雛・育成から殺処分を進めるという作業として実施していた。

この期間中に産卵されるタマゴは1個たりとも食用にしない、という自分で決めた規律を厳しく守りながらの悲しい作業であった。

6月末から7月中旬にかけて、今後の福島県の養鶏業界の復帰・復興をどのように進めるかを個々の経営者と相談する中で、突如起きたのが放射性セシウム汚染和牛肉の大問題である。

### 放射性セシウム

筆者にとっては、原子力や放射能問題は他人の問題であった。原子炉の構造や各種放射性物質に関する知識は高等学校時代の教育によるそれ以外にはない。放射性セシウムも、テトリイ以外の問題の一つである。たぶん大部分の読者諸氏にとっても事情は同じであろう。

専門外ではあるが、多少の知識を

整理するため、次にセシウムという物質についてまとめて記述した。

### セシウムとは

セシウム(Cs、原子番号55)とは、ラテン語で「灰青色の=Caesius」に由来するアルカリ金属で、融点は

28℃である。科学的な性質は同族のアルカリ金属、ルビジウム・カリウムと似る。同位体には<sup>133</sup>Cs、<sup>134</sup>Cs、<sup>135</sup>Cs および <sup>137</sup>Cs がある。

セシウム<sup>134</sup>は2年、セシウム<sup>137</sup>が30年の半減期を持つ。セシウム<sup>137</sup>はベータ崩壊によって

短命なバリウム<sup>137</sup>を経て非放射線のバリウムとなる。セシウム<sup>134</sup>は直接バリウム<sup>134</sup>へ崩壊変化する。セシウム<sup>137</sup>はバリウム<sup>137</sup>へベータ崩壊するため強いガンマ線を発生する。セシウム<sup>137</sup>は中性子の捕獲(中性子を吸収して別の重い物質へ変化するこ

う)によって別の重い物質へ変化するこ



原発事故後の経過 (朝日新聞より)

と)率が低いため中性子捕獲による処理ができず、自然崩壊を待つことになる。体内に入ると血流に乗って腸や肝臓にβ線とγ線を放出し、カリウムと置き換わって筋肉に蓄積した後、腎臓を介して排出される。セシウム137は、体内で代謝・排出されるまで100〜200日かかる。この間に発生する放射線被爆量が問題となる。一方、セシウム137は医療用の放射線源としても使われる。

現在の理論によれば、セシウム137は中性子捕獲をほとんど行わないため、半減期が長い、とされているが、万が一にでもこれが人為的に促進できるノウハウが確立できれば、半減期を短縮できることになる。これこそ究極の夢の技術といえる。

## 最初に問題視されたのは

放射性セシウムの汚染が確認された和牛肉で最初に問題とされたのは、東京都が自主的に実施した検査で放射性セシウムが陽性とされた時点であり(6月末)、さらに7月16日に福島県南に位置するエリアで生産された和牛でも問題が判明した。

トレースバックによって、いずれ

も汚染稲わらを給餌したことに起因することが判明した。とくに後者では、粗飼料としての稲わらの生産実態の把握が遅れたためであるとして、マスコミの行政に対する責任追及が激しさを増した。

県内の採卵養鶏業界では、この事件の波及効果によって市場が強く反応する結果を招いた。この時点で、消費者の不買傾向が大きな風評被害を招いたというより《心配になった消費者がマーケットへ電話で問い合わせる》という行為がたび重なり、その対応に疲れたマーケット側が陳列を控える、という流れがメインといえる。福島県の採卵養鶏業界がとった一連の対策プロジェクトは特筆するに足りるであろう。(次号に続く)